

令和2年度 西条市の教育に関するアンケート調査 総まとめ

(1) 小学校や中学校がどのようなところであるべきか

小学6年生保護者、小学校教員、市民の結果から、小学校は「子どもが基礎的な学力を身に付けるところ」であり、かつ「子どもが多様な考えに触れ、資質や能力を伸ばしていくところ」だという意見で一致しました。どちらかといえば、保護者や市民（特に年齢の高い方）が小学校に対して子どもの基礎学力向上を求める傾向がありますが、保護者、小学校教員、市民が概ね小学校のあり方に対して同じ考え方を有していると受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教員の結果から、中学校も小学校と同様に「子どもが基礎的な学力を身に付けるところ」であり、かつ「子どもが多様な考えに触れ、資質や能力を伸ばしていくところ」だという意見で一致しました。しかしながら、こちらは保護者が中学校に対して子どもの基礎学力向上を強く求める傾向がみられることから、子どもの基礎学力向上と同程度に子どもの資質や能力を伸ばしたいと考えている教員（特に若い教員は基礎学力の向上よりも子どもの資質や能力向上を重視する傾向にある）との間に考え方の違いが生じているのではないかと受け止めることができます。

(2) 小学校や中学校で身に付けることが大切だと思う能力や態度

小学6年生保護者、小学校教員、市民の結果から、小学校では「自ら学び、考え、主体的に行動する力」を身に付けることが最も大切であり、かつ「教科の基礎学力」を身に付けることが大切だという意見で一致しました。どちらかといえば、保護者が教員や市民よりも「教科の基礎学力」を身に付けることが大切だと考えている傾向がみられます。

また、中学3年生保護者、中学校教員の結果から、中学校においても小学校と同様に、「自ら学び、考え、主体的に行動する力」を身に付けることが最も大切であり、かつ「教科の基礎学力」を身に付けることが大切だという意見で一致しました。保護者と教員の傾向が概ね一致していることから、教員と保護者の双方が、子どもの基礎学力の習得が大切だと考えているとはいえ、子どもが自ら学び考える力を身に付けることが最優先だと考えていると受け止めることができます。

一方で、小学校教員と中学校教員の結果から、小学校教員は年齢によって大切だと思う能力や態度に関する考え方の違いがみられなかった一方で、中学校教員は年齢によって考え方に大きな違いがみられたことが特徴です。また、所属する中学校の地区別にも考え方に違いがみられましたが、保護者の考え方も地区によって異なるため、教員と保護者の考え方が一致している状況から問題ないと受け止めることができます。

(3) 大切だと思える能力や態度を育むために今後力を入れるべき施策

小学6年生保護者、小学校教員、市民の結果から、優先順位に違いがあるものの、小学校では教員の資質向上に力を入れるべきということで意見が一致しました。また、保護者はICT教育の更なる推進に力を入れるべきと考え、市民は道徳教育に力を入れるべきと考える一方で、教員は教員自身の事務量軽減によって子どもと向き合う時間を確保するべきと考えていることから、教育現場が求められる理想と教員の事務量過多という現実とのギャップが大きいのではないかと受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教員の結果から、優先順位に違いがあるものの、中学校においても教員の資質向上に力を入れるべきということで意見が一致しました。また、小学校と同様に、保護者はICT教育の更なる推進に力を入れるべきと考える一方で、教員は教員自身の事務量軽減によって子どもと向き合う時間を確保するべきと考えており、教育現場が求められる理想と教員の事務量過多という現実とのギャップが大きいのではないかと受け止めることができます。

一方で、小学校教員と異なり、中学校教員では年齢の高い教員を中心に、教員の資質向上に力を入れるべきという考え方が多くみられ、特に規模の大きい中学校（または規模の大きい中学校が集中する西条地区）でその傾向が強くみられます。(1)(2)の結果からも、中学校教員は年齢によって考え方に大きな違いがみられたことから、何が要因となって考え方の違いが生じているのか、なぜ年齢の高い教員を中心に資質向上に力を入れなければならないと考えているのか、西条市の公立中学校は何を目指すべきなのかを統合的に議論していく必要があるのではないかと受け止めることができます。

(4) 小学校や中学校の学習環境を考える上で重視すべきもの

小学6年生保護者、小学校教員、市民の結果から、小学校では「学校の教員の人数や質が充実し児童一人ひとりに行き届いた教育が受けられる」環境を重視すべきだという意見で一致しました。また、優先順位に違いがあるものの、「集団の中でコミュニケーション能力を身に付けやすい」「クラス内の仲間意識が生まれやすい」と子どもが集団の中から学ぶことができる環境を重視する意見についても概ね一致しましたので、保護者、小学校教員、市民が概ね小学校の学習環境のあり方に対して同じ考え方を有していると受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教員の結果から、中学校においても「学校の教員の人数や質が充実し児童一人ひとりに行き届いた教育が受けられる」環境を重視すべきだという意見で一致しましたが、小学校の場合と異なり、特に保護者よりも教員側が人数や質の充実を強く意識している傾向がみられます。年齢別にみても、40歳以上の中学校教員の8割近くが「学校の教員の人数や質が充実し児童一人ひとりに行き届いた教育が受けられる」環境が重要と選択しており、小学校教員と比較しても顕著に傾向がみられます。(1)(2)(3)の結果もふまえ、何が要因となっているのか、なぜ40歳以上の教員が特に教員の質や人数の充実を求めているのかを検証する必要があるのではないかと受け止めることができます。

(5) 未来の小学校や中学校にお子様を通う場合の考え方

(教員に対する質問は、教育環境として望ましいと思う小学校や中学校の規模)

小学6年生保護者、小学校教員、市民の結果から、保護者や市民は「児童数が少なくても、複式学級になるまでは1学年1学級の小学校に通わせたい」という考える一方で、教員は1学年2学級または3学級が教育環境として望ましいと考える結果となりました。特に、規模の小さい小学校の保護者や年齢の高い市民が「児童数が少なくても、複式学級になるまでは1学年1学級の小学校に通わせたい」という意向を強く有する一方で、ともに「複式学級に通わせたい」と回答した比率は低くなる傾向がみられます。これらの傾向から、本市の小学校においては、少なくとも将来的に複式学級になることが現実味を帯びてきた段階において、子どもに最適な教育環境を提供するためには何が必要なのかという議論を本格的に進める必要があると受け止めることができます。

また、中学3年生保護者、中学校教員の結果から、保護者は1学年3学級または2学級の中学校に通わせたいと考える一方で、教員は1学年3学級または4学級が教育環境として望ましいと考える結果となりました。特に、現時点で規模の小さい中学校の保護者の半数以上が1学年2学級の中学校に通わせたいと回答する一方で、同じく現時点で規模の小さい中学校の教員の半数以上が1学年3学級の中学校が教育環境として望ましいとの考えを有している傾向がみられます。これらの小規模な中学校は、すでに1学年2学級以下の状況にあり、かつ将来的に1学年1学級以下になることが想定される中学校も存在していることから、中学校においても、子どもに最適な教育環境を提供するためには何が必要なのかという検討を進めていく必要があると受け止めることができます。

(6) 進学希望の中学校（中等教育学校）および高等学校（高等専門学校）

小学6年生保護者の結果から、小学6年生の11月時点において、市外の中学校（中等教育学校）に進学する意思を有している児童が約3.7%となる一方で、「どちらとも思わない」と回答した児童が約12.6%となりました。進学先を決定する直前のタイミングで実施した調査であったことから、本市の小学6年生は、市外への進学意向を明確に有している児童はそこまで多い状況にないと受け止めることができます。

また、中学3年生保護者の結果から、中学3年生の11月時点において、市外の高等学校（高等専門学校）に通う意思を示している生徒が約10.3%となる一方で、「どちらとも思わない」と回答した生徒が約28.5%となりました。進学先を決定する直前のタイミングで実施した調査であったことから、本市の中学3年生は、市外への進学意向を明確に有している生徒がそこまで多い状況にはないものの、実際に進学先を決定するまでの過程において、何らかの事情で市外の高等学校（高等専門学校）への進学を決定している状況にあるのではないかと受け止めることができます。

(7) 図書館の利用状況

小学6年生保護者、中学3年生保護者の結果から、小学6年生と中学3年生のいずれも半数を超える方が図書館を利用する状況にあり、特に、中学3年生よりも小学6年生が多く利用する状況にあります。市民のいずれの年齢も、小学6年生より利用状況が低いことから、本市の図書館は最も小学生から利用されていると受け止めることができます（延べ利用者数ではなく、年齢別にみた場合の利用率という観点です）。また、詳しい要因はわかりませんが、小学6年生、中学3年生、市民のいずれも、東予地区の方の利用状況が最も低くなる傾向がみられました。

なお、小学校教員、中学校教員の結果から、教員における図書館の利用頻度が高く、特に小学校教員の利用頻度が高いことがわかります。

(8) 図書館の利用環境に対する満足度

小学6年生保護者、中学3年生保護者の結果から、小学6年生と中学3年生のいずれも図書館の利用環境に満足する状況にあり、特に、中学3年生よりも小学6年生がより満足する状況にあります。市民においては、30～49歳が小学生と同程度に満足する状況（29歳以下も満足する状況にあるが、不満足の数も高い）にあることから、本市の図書館は小学生および30～49歳がより満足する利用環境にあると受け止めることができます。また、詳しい要因はわかりませんが、年齢が高くなるにつれて利用環境に満足する方が少なくなるとともに、小学6年生と中学3年生においては小松温芳図書館を主に利用している方、市民においては東予図書館を主に利用している方で、利用環境に満足する方が少ない傾向がみられました。

なお、小学校教員、中学校教員の結果から、教員は図書館の利用環境に満足する状況にあることがわかります。

(9) 主に利用している図書館

小学6年生保護者、小学校教員、中学3年生保護者、中学校教員、市民の結果から、共通して西条図書館を主に利用する傾向が高くなり、特に中学校教員が西条図書館を利用する傾向が高くなりました。

(10) 図書館を利用した主な目的

小学6年生保護者、中学3年生保護者の結果から、小学6年生と中学3年生はともに本を借りる目的で図書館を利用する傾向にあり、中学3年生は学習コーナーで勉強する目的で利用する傾向もありますが、小学6年生は本を借りる以外の主となる利用目的がみられない状況にあります。

一方で、市民の結果から、すべての年齢においても本を借りる目的で図書館を利用

する傾向にあります。年齢が高くなるにつれて本を借りる以外の目的で利用する方が多くなる傾向がみられます。この傾向は（８）の利用環境に対する満足度とほぼ同じ傾向を示していることから、本市の図書館は、本を借りる目的の利用者が利用環境に満足する傾向にある一方で、本を借りる目的以外の利用者に対し、更なる利用環境の満足度を高める余地があると受け止めることができます。

（１１）図書館に関連して今後力を入れるべき点

小学６年生保護者、小学校教員、中学３年生保護者、中学校教員、市民の結果から、「貸出および閲覧書籍の充実」を求める声とともに、特に若い方を中心に「図書館に行かなくてもパソコンやタブレットで貸出・閲覧可能な電子図書館の導入」を求める声が多くなりました。

（８）（１０）の結果も踏まえ、若い方を中心に、更なる書籍の充実のみならず、電子図書館の導入を求めるニーズが高いと受け止めることができます。

一方で、本を借りる以外の利用目的が多い年齢の高い方は、「調べ物や読書などの相談ができる環境の充実」を求めるニーズが高い傾向がみられます。また、すべての年齢を通じ、イベントの充実を求めるニーズも一定程度みられます。

（１２）公民館の利用状況

小学６年生保護者、中学３年生保護者、市民の結果から、小学６年生保護者、中学３年生保護者は比較的公民館の利用頻度が高い状況にあります。また、小学校教員、中学校教員の結果から、教員における公民館の利用頻度は更に高い状況にあります。

なお、市民においては、７０歳以上で公民館の利用した方が５０％を超えていますが、その他の年齢では公民館を利用した方が５０％を下回り、３０代では３０％弱、２０代では２０％弱と年齢が低くなるにつれて利用率が低下する傾向がみられます。したがって、本市にとっては、若い方の公民館利用をいかに高めていくのかという点が課題であると受け止めることができます。

（１３）公民館の利用環境に対する満足度

小学６年生保護者、中学３年生保護者、市民の結果から、小学６年生保護者の利用環境に対する満足度が最も高くなり、年齢が高くなるにつれて満足度が低くなる傾向がみられます。また、小学校教員、中学校教員の結果から、小学校教員の利用環境に対する満足度が高いものの、小学校教員と比較し、中学校教員の満足度はやや低くなる傾向がみられます。対応が急がれる訳ではありませんが、いかなる要因で年齢が高くなるにつれて利用環境に満足する方が少なくなるのか検証する必要があると受け止めることができます。

(14) 公民館活動を通じて身に付けた知識・技術

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、公民館活動で「人間関係を広げ、仲間づくりにつながっている」方が最も多くなり、次いで「特に何も身に付けていない」方が多いという傾向で一致しました。また、若い方が「人間関係を広げ、仲間づくりにつながっている」と回答し、年齢が高くなるにつれて、公民館活動を通じて「趣味や特技に活かしている」「健康の維持、増進に役立っている」方が多い傾向がみられます。本市では、年齢によって公民館活動を通じて身に付けた知識・技術が異なるとともに、高い比率で公民館活動を通じて特に何も身に付けていない方がいると受け止めることができます。

なお、本市ではお住いの地区によっても公民館活動を通じて身に付けた知識・技術が異なる傾向がみられます。

(15) 公民館に期待する事業

小学6年生保護者、小学校教員、中学3年生保護者、中学校教員、市民の結果から、共通して公民館に「地域の防災に関する事業」を期待する方が最も多く、次いで「子どもの安全・安心な居場所づくりや体験活動に係る事業（放課後子ども教室）」「子ども学習支援活動に関する事業（地域未来塾）」が多くなる傾向で一致しました。年齢やお住いの地区によって多少の違いはありますが、防災や子育てが地域住民にとって大きな関心事ではないかと受け止めることができます。

(16) 芸術文化に対する興味関心

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、小学6年生や中学3年生などの若い世代は「映画や漫画・アニメなどのメディア芸術」に興味関心を抱いているが、年齢が高くなるにつれて興味関心を抱く方は少なくなり、「コンサートや合唱などの音楽」に興味関心を抱く方が多くなる傾向がみられます。また、50歳以上になると、「絵画や彫刻・陶芸などの美術」に興味関心を抱く方が多くなる傾向がみられます。

また、小学校教員、中学校教員の結果から、市民と比較して「コンサートや合唱などの音楽」に興味関心を抱く方が多くなる傾向がみられます。

(17) 芸術文化に触れる機会の充実度

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、(16)の結果と同様に、小学6年生や中学3年生などの若い世代は「映画や漫画・アニメなどのメディア芸術」に触れる機会が充実していますが、年齢が高くなるにつれて機会が充実している方は少なくなり、「コンサートや合唱などの音楽」に触れる機会が充実している方が多くなります。また、50歳以上になると、「絵画や彫刻・陶芸などの美術」に触れる機会

が充実している方が多くなりますが、60歳以上になると、芸術文化に触れる機会自体が少なくなる傾向がみられます。

また、小学校教員、中学校教員の結果から、小学校教員および中学校教員は、市民と比較して「コンサートや合唱などの音楽」や「絵画や彫刻・陶芸などの美術」に触れる機会が充実している傾向がみられます。

(18) ふるさとの歴史文化に対する誇りや愛着度

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、小学6年生および中学3年生におけるふるさとの歴史文化に対する誇りや愛着度が著しく低いことがわかります。一方で、年齢が高くなるにつれて、ふるさとの歴史文化に対する誇りや愛着度が高くなる傾向が見られます。

また、小学校教員、中学校教員の結果から、市民と比較して教員におけるふるさとの歴史文化に対する誇りや愛着度が高い傾向がみられます。

(19) ふるさとの先人の教えに学ぶ機会の充実度

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、市民と比較して小学6年生および中学3年生はふるさとの先人の教えに学ぶ機会が充実しており、特に小学6年生が充実している傾向にあります。しかしながら、(18)との比較から、ふるさとの先人の教えに学ぶ機会の充実が、ふるさとの歴史文化に対する誇りや愛着度の上昇と必ずしも直結していないのではないかと受け止めることができます。また、小学校教員、中学校教員の結果から、同じく市民と比較して小学校教員および中学校教員は比較的ふるさとの先人の教えに学ぶ機会が充実しており、特に小学校教員が充実している傾向にあります。

また、70歳以上で充実していると回答する方が多く、地区別には小松地区で多くなる傾向にあります。したがって、本市では小学校を中心とする義務教育でふるさとの先人の教えに学ぶ機会が充実している傾向がありますが、一般的には年齢が高くなるにつれて学ぶ機会が充実する傾向にあり、地区によっても大きな違いがあると受け止めることができます。

(20) ふるさとの先人に対する知識

小学6年生保護者、中学3年生保護者、市民の結果から、小学6年生および中学3年生におけるふるさとの先人に対する知識は低い傾向にあることがわかります。一方で、小松地区においては、小学6年生の近藤篤山に関する知識が同地区にお住まいの大人の知識よりも高い傾向が顕著であり、小学校における先人教育の成功事例ではないかと受け止めることができます。